

基調講演 2

平安時代の庭園

—日本庭園のルーツを掘る—

京都産業大学日本文化研究所所員・文化学部教授
鈴木久男

京都産業大学文化学部の鈴木久男と申します。どうぞよろしくお願ひします。私は約30年間、京都市埋蔵文化財研究所において平安京や鳥羽離宮などの遺跡を発掘調査させていただきました。今日はその調査中に発見しました庭園遺構を紹介しながら、考古資料から見た平安時代前期の庭園をお話しいたします。その中心は、平安京右京三条一坊六町です。

私に取り扱う庭園は、作庭から現在まで伝世されてきたのではなく、廃絶した庭園、すなわち発掘庭園です。いいかえれば、一度死んでしまった庭園です。いまから見ていただく庭園の資料は、土中で腐敗せず残ったものです。ですから、生き生きとした活気のある空間ではありません。廃虚になってしまった庭園を、発掘調査情報と文献史料を交互に混ぜながら話を進めます。なお、皆さん方にお配りした資料の最後に参考文献が入っていますので、それを自宅に帰られて、パソコンを開いていただいて、京都市埋蔵文化財のホームページに行きますと、文献一覧が出てきますので、あとは皆さん方が自分なりの見方や考え方の中で、平安時代前期、いまから申し上げますところの藤原良相邸を復元していただくと幸いです。

藤原良相邸は平安京の条坊復元図ですと、ここに位置します。すなわち右京三条一坊六町です。なお、発表で使用する各種の情報は公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所から提供して頂いたものでございます。ご厚情に感謝いたします。

藤原良相は、平安時代前期の方で、西暦 850 年前後に活躍されました。次の資料は、同時代の庭園遺構が発見された位置です。水色の部分は、これは池跡を表しています。矢印部分は冷泉院、以下、朱雀院、淳和院などがありました。なお藤原良相の兄であった良房の邸宅（染殿）は、ここに位置しました。ここは発掘調査をしていませんが、今日の話に関連するために取りあげました。

ところで藤原良相邸の所在地については、諸説ありました。『平安京提要』は古代学協会と財団法人京都市埋蔵文化財研究所が、建都 1200 年記念として刊行したのですがその頃は、現在の場所ではなく、こちら（右京三条一坊四町）になっています。邸宅の主を確定するのはなかなか難しいものです。

次の資料を見ます。良相邸は朱雀大路のすぐ近く。その周りには右京職、左京職、穀倉院などの官衙が所在した中心地的な場所に邸宅を構えていました。

次に右京三条一坊六町が良相邸であることを確定し発掘調査資料を見ていただきます。この出土遺物、2点です。まず、こちらですけれども、これは「題簽（だいせん）」と言いまして、文書の軸の部分で見出しになっている部分です。こういう卷子状になっているこの部分になるわけです。昔は、全部、卷子ですから、横に山のように積みますので、何を書いてあるかすぐ分かるという、そういったようなもの。ここには「斉衡四年三條」と書いてありますし、ここに「正倉」。もう一個の方は、これは墨書土器と言います。土器の表面に墨で文字を書いたものでありまして、「三条院釣殿高坏（さんじょういんつりどのたかつき）」と書いています

下の方の図面ですがこの部分は、良相邸の北側になります。「題簽」は、池の中から出土しました。年号は「斉衡四年」です。あとここに、「正倉」とあります。それから「帳」はここです。発見当時読めなかった部分については、「三條院」の「院」だろうと考えられています。そうしますと「斉衡四年三條院正倉帳」と読むことができます。斉衡 4 年は、西暦 857 年ということが分かります。

その次は、この墨書土器です。これを見ますと、ここに「三条院」。加えてその下方に、「釣殿」とあります。この土器はこの池の中から出土しました。池のすぐ横には建物があります。ところで釣殿というのは、平安時代の寝殿造によく登場する建物です。「高坏」というのは、我々が高坏と呼んでいる土器です。こうしたことから池の横で検出した建物を、釣殿と推定しています。染殿や神泉苑には、「釣台」と出てきます。同じようなものでしょう。

次に六町および周辺部の説明を行います。今回は京都アスニーの平安京創生館で展示中の平安京の模型で当時の様子を想像していただきます。

中央にあるのが朱雀小路です。朱雀門があって、大極殿、それより西側に豊楽院、天皇さんがお住まいだった内裏。これですね。ここにあります大きな空間が朱雀院になります。これが朱雀門になります。こちら側のちょっとぼやけていますが、この大きいのが神泉苑になります。これが朱雀門。ここに小さな建物群があります。穀倉院です。こちら側の方が右京職。こちら側が左京職です。京式は裁判や戸籍などを取り扱っている官衙でした。右京職の発掘調査では、「計帳」「計帳所」などの墨書土器が沢山発見されここが間違いなく右京職であったことを確認しています。しかしながらこの模型では六町は、良相邸になっていません。

次に六町で発見された遺構について、解説します。平安京の1町は120メートル四方です。横長の方眼はそれを15メートル×30メートルで細分したものです。京都市埋蔵文化財研究所の調査は、ほぼ六町の北側半分を、明らかにしています。七町の説明は時間の関係から省きますが、ほとんどが池や湿地で、建物は希薄でした。

この画像をご覧ください。ここに大きく見える窪地が池です。この辺が釣殿になります。これが愛宕山、このあたりが嵐山です。

次の画像に移ります。ここに京都タワーが見えるのが分かりますか。こちらのいまの矢印の部分が二条駅になります。先ほど見ていただいた池がここです。この辺全体が庭園です。

さらに池の深さ等を見ていただくために、アングルを下げます。これは北側から南側を見ております。深さを何となく知っていただくために、セクションが残っておりますけれども。池がこの部分です。半島状になっているグレー部分が池になります。ここには、釣殿とした建物遺構、さらにはこちらの方にも建物遺構が見つかっています。

ここで良相邸庭園の調査で注目したい項目を少し述べます。

866年の春に清和天皇は良相邸に行幸され、美しく咲いたサクラをご覧になられている。その場所は、京都市埋蔵文化財研究所が調査をされた、6町北東から東にあたると思います。いわゆる陰陽五行では、ちょうど北から東方向にあたります。釣殿建物や墨書土器が出土した池の中からは、サクラに関する植物遺体が発見されています。これはその傍証ではないかと思っています。

庭石が全く発見されていないことも注目されます。例えば冷然院の調査では、重さ約50キログラムから200キログラムの庭石が、池の汀から数十石も発見されています。ところがここ良相邸では、一点も出土していません。これは庭石を据えつける意匠の庭を良相は作庭しなかったのではなく、邸宅廃絶後に持ち去られたのではないかと考えます。例えば藤原道長とか藤原頼通などは作庭時に、いろいろな方法で、資材を物色していることは、皆さんご存じの通りであります。良相邸の庭園もそうした犠牲になり、持ち去られてしまったのではないかと想像しています。

良相は、六町に常住していなかったのではないかと考えます。季節のよい時期に宴をする、いわゆる別宅であろうという気がしてなりません。遺構配置が閑散としていること。また、建て替えがほとんどないというのも、その理由です。

池の下層からは、平安時代前期の井戸が検出されています。この井戸は、良相邸の早い段階のものではないかとみています。

以上で終わります。

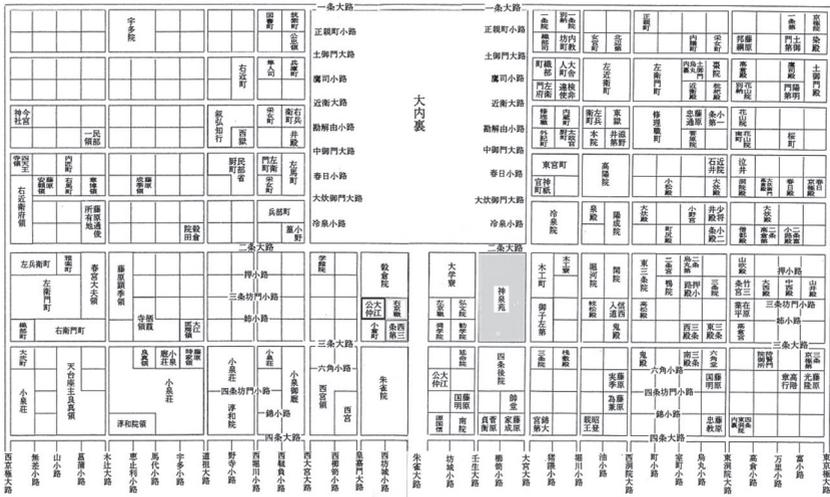
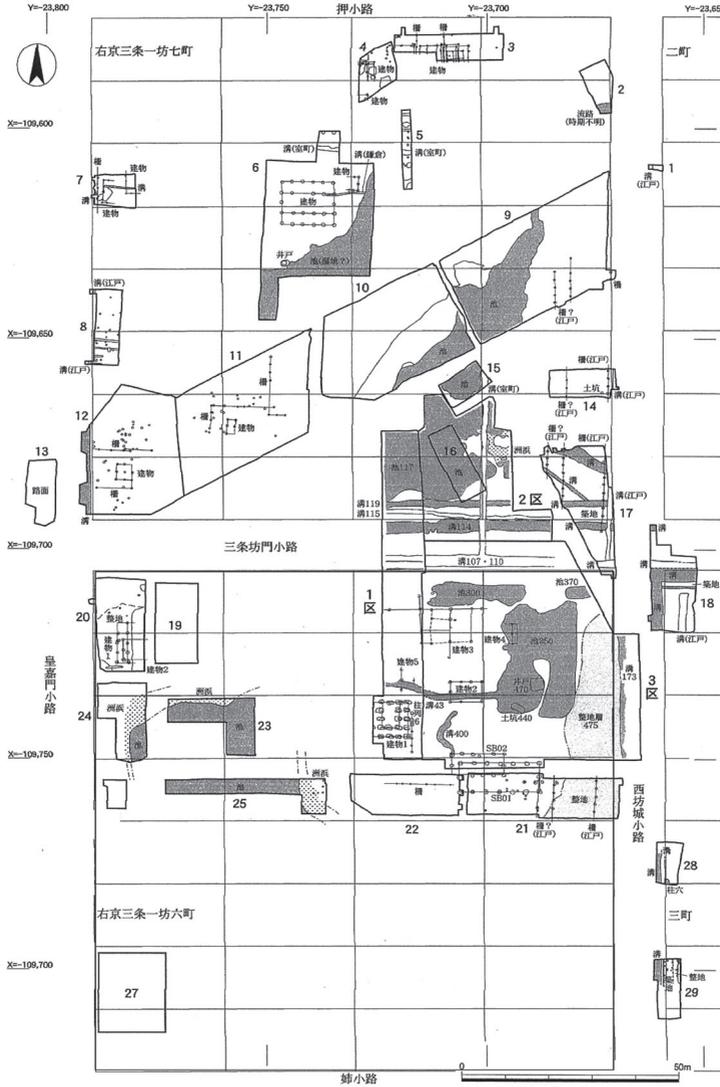


図1 藤原良相邸（百花亭）と平安京条坊園（『平安京提要』より転載）
 参考文献：『平安京提要』古代学協会・（助京都市埋蔵文化財研究所編）1994年



周辺調査位置図

図2 藤原良相邸 (平安京右京三条一坊六町) 遺構配置図

参考文献: 『平安京右京三条一坊六・七町跡-西三条第(百花亭)跡-』(公財)京都市埋蔵文化財研究所 2013年